
右京VSコナン

ミスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

右京VSコナン

【Nコード】

N1685Z

【作者名】

ミスター

【あらすじ】

これは作者ミスターが短編で書いている小説 右京VSコナンのリメイク版です 短編の連載はいたしませんので了承ください

第1話A

12月1日 21時45分 東京都米花町

米花町の某所で黒づくめの組織が取り引きをしていた

ウオツカ「例の物は？」

取引相手「これだ」

何かの資料を渡す

取引相手「お礼は？」

ウオツカ「お礼ならちゃんとありますで」

と黒バックから現金を取り出すウオツカ

取引相手「取引成立だな」

ウオツカ「ああ」

女「きゃ」

若い女性の悲鳴が

そして長髪の男が出てきた

ジン「なんでハガネがここにいるんだ？」

ハガネ「上の命令よ」

そう彼女は答えた

ジン「あの方か…」

ジンはつぶやいた

ウオツカ「どうしますか？ 兄貴」

ジン「たとえあの方の命令でも

取引を見た物は殺す」

そう言つて薬みたいな物を出した

ハガネ「なにをするの！」

ジン「決まっているだろ 例の薬で

お前を殺す！」

そう言つて無理やり薬を飲ませるジン

ジン「ずらかるぞ」

ウオツカ「了解！」

ジン（あばよハガネ）

その場から消えたジンとウオツカと取引相手

ハガネ「体が熱い！」

そう言つて気を失つていった…

22時20分

ハガネは気づいた

ハガネ「生きてるて事は副作用が効いたのね」

そう彼女は幼児化したのだ

そして誰かに電話を入れる

電話「はい 小野田です ただいま留守にしております

後ほどおかけ直してください」

ハガネ「なんで留守電なの！」

小野田とはもちろん警察庁官房室長の

小野田警視監の事である

何故彼女が小野田にかけたと言うと

小野田の孫だからだ

八ガネ「杉下警部なら」

と急いで花の里へ向かう八ガネ

花の里では

たまき「お茶つけにします？」

右京「わさびは多めに」

たまき「わかってます」

薫が入って来た

たまき「いらっしやい」

薫「うつす」

その後小野田が来た

たまき「あらおめずらしい」

小野田「杉下と同じ物を」

たまき「わかりました」

右京「僕に何か用ですか？」

小野田「ああ 久々孫から電話があつたんだ」

右京「どういう？」

小野田「出てないよ」

右京「はい？」

小野田「どうせ あれが欲しい これが欲しい
の催促電話だと思うから」

右京「何時頃電話があつたんですか？」

小野田「20時23分」

右京「そんな時間に催促の電話を彼女が入れるとは思いませんか」

小野田「……」

右京「例えばこういうのは考えられませんか
何者かに追われてて命の危険にさらされてる」

小野田「なるほど」

その後まだ一人客が…

たまき「いらっしやい」

客はハガネだった

薫「子供のようですね」

右京「ええ」

小野田「君　もしかして優花か？」

ハガネ「……」

ハガネは沈黙する

薫「優花って官房長のお孫さんの…」

右京「ええ　確か高校生くらいだと官房長から聞いてます」

ハガネ「私は優花よ！」

と叫んだ

小野田「何でこんな姿になったか

話してくれるよね？」

優花「わかったわ全て話す」

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1685z/>

右京VSコナン

2011年12月5日23時46分発行